

## 務臺理著作『表現と論理』

谷 山 隆 夫

本書は昭和十年以降五ヶ年に亙る著者の勞作、十三篇の論文、の結晶である。その各面はそれぞれ獨自の光彩を發しつつ、全體として深く微妙な輝きを融成してゐる。製作順にその各篇を跡づけてゆくと、一作毎に高峰へ攀り、一作毎に新たな展望を開いてきた著者のユニークな思索に心からなる讃嘆の情を禁ずることができない。

ところで、それらの間にあつて、近作「論理と日常性」・「矛盾の論理」・「全體主義の論理」・「特殊的なるものの論理」等の各論題が物語るやうに、著者の關心は一方論理的なるものの闡明に置かれてゐる。他方また、比較的舊い「表現の本質」・「文學と表現的世界」等の論題が示すやうに、著者の思索が表現を中心として旋回してゐることも容易に推察できる。本書の書名の依つて來る所以であらう。しかも茲では表現と論理とが渾然たる一

體をなしてゐる。従つて本書は内容において「表現の論理」である。そのほか文化問題を主題とする三論文は著者の關心の所在を示すものであり、また「形成的人間」は心身關係の考察を通じて廣く生産、ひいては技術、の問題を解明され、更に人間存在の根本義に言及されたものである。このやうな主要關心に導かれつつ、本書の行文はあくまで流暢であり、論構は精緻を極めてゐる。その行論の清澄さのために、必ずしも易解的とはいへずかつ幾多の創意を藏する内容が、讀者に些の晦澁さをも感ぜしめない。本書は、西田哲學の源泉から發して、一方これとの親近性を保ちながら、他方獨自の流域を形成し來つた著者の特殊位置を確證するものであるまいか。

ではいつたい著者は論理的なるものを如何に解して居られるであらうか。著者は論理の最も根源的な形態を

原始分割としての判断に求められ、かつ判断を對象的判断と作用的判断とに大別される。前者はいはば同一性的判断であつて、自己を前後同一的に維持する主語的實體とその屬性との從屬的關係を示すものである。それは形式論理で問題にされるやうな内屬關係を主にする判断である。これに反して、作用的判断は主語の實體的性格を否定して、主體的性格を極度に發揮する判断である。後者にあつては「分割は無底的であつて、肯定と否定との中間に横たはる第三のたらしはない」(頁六)、即ち肯定と否定とは「ノエシス的に、無底的に分割されるのである」(頁七)。従つてここでは、判断は原始分割・無限切断として遂行される。然しその反面にまた、ここには切断即結合としての否定的主體が現れる。詳しくいへば、「肯定否定を眞に統一するものは絶対否定として自己矛盾である。判断に於ては主語は無底的に切断されながら、しかも自己矛盾に媒介されて自己同一に於てあると云はなければならぬ。判断に於て切断は結合である」(頁七)。

さうして著者は判断の原型を、かかる作用的判断に見出して居られる。このことは、「判断とは主語が自己をそのままにして何ものかを所持するといふことではなく

て、自己の存在そのものを得るか失ふかのいづれかを決定することである」(頁七)とされる著者の判断觀と呼應するものである。

かやうに考へると、判断の主語となるものは、「個がそこから出で、そこで個となり、またそこで個を解體するところの絶対否定的世界」(頁二)でなければならぬ。これと聯關して、作用的判断を原型とする論理は、「個の論理であると共に、個がそこに於いて個を形成するところの世界の論理」、「即ち判断が眞の意味で判断を形成する場處の論理でなければならぬ」(頁三)。「判断の論理はこのやうな絶対無の場處から生れてくる」(頁三)のである。さうしてかかる論理の原型のうちには、切断と結合との「同時存在」が見出される(註七)。この「同時存在」といふ概念は、もと西田哲學に發したものと思はれるが、著者の考へ方において甚だ重要な役割を演じてゐる(例頁八)。それはいはゆる「即」に相當し、ここでは判断の根源的場處における矛盾の統一を意味する。従つてそれは場處の論理と不可分な關係を有つ、即ち同時存在の根據は「絶対否定としての無の場處」のうちに存するのである。以上要するに「作用的判断の構造は、作

用的なるものの無底的切斷と、その結合との同時存在、即ちその切斷が同時に結合であること、及びこの結合の根柢が絶對無、絶對否定に裏付けられてゐることによつて、……動的なはたらきを藏してゐる」(二五頁)。さうして「如何なる論理もこの判斷的『場處』の二重限定を原型とし、そのメタモルフオーゼとして成立する」(六頁)のである。

ところで著者は右のやうな同時存在を「同時」存在と見て、それに聯關させて時間問題を解明されてゐる。著者によれば「判斷の論理に於ける同時結合の内容が、無の場處としての世界に包攝されることによつて、即ち世界の推論式的構造のもとに於いて、單なる判斷の經歷としてでなく、ときの經歷として、ときの論理的性格を現はすことができる」(二二頁)。換言すれば、作用的判斷の特質を「作用の無限切斷とその結合の同時性にあるとみるとき、この意味の同時の内容を充實するために、自づから判斷の原型的構造から、ときの原型的構造に到達せざるを得ない」(二二頁)のである。このやうな視點から著者は時間の時成に透徹した分析を加へて居られる。その所論は時間論に興味を抱く者にとつて甚だ教示に富むと思

はれる。少くとも筆者自身についていへば、そこから多大の裨益を受けたことを感謝せざるを得ない。

著者に依れば、「時は流轉經歷しながら、しかもその經歷を透脱して、同時存在に於てある」(二四頁)。すなはち「ときとは動かぬものである」(二五頁)。時は「多の原理であつて、……五に前後無限に際斷されて居りながら、しかもそのことによつて、同時存在の全一を構成する。

……一即多、多即一の原理は、時に於いて最も鮮やかに示される」(二五頁)のである。併し一即多、多即一の限定はなほ形式的である。いひかへると、時の移行とその同時存在とが如何なる場處に於いて限定されるか、はなほ不明である。従つて「各々のときがそこから生れ、そこではたらくところの、絶對否定に於いてある場處的世界」(二六頁)の闡明が更に必要となつてくる。即ち時の論理は當然、場處的世界の論理へと發展せねばならない。「ときは、……はじめから場處の世界に包攝されてゐるのである」(二六頁)。これによつて時は永遠のいまといふ性格をおびることができる。かつ場處的世界そのものはまた、もはや時間のうちにあるのではなくて永遠のいまに於いてあることとなる。この意味で永遠のいまとは無

時間的時間の謂にほかならない。さうしてこれによつて  
 ときの過去・現在・未來の同時存在が初めて可能となるの  
 である。かくして眞の時間とは「持續の底を割つて絶對  
 否定的に自己を否定しつくすことによつて、却つて主體  
 的に復活した無時間的時間でなければならぬ」(頁八四)。  
 ところがかく時が場處的世界に包攝され、また「時その  
 ものをゆきつくして、ときの他者に到達するとき」(頁  
 七五)、各々の時は個體の意義をおびる。それ故「ときと  
 きとの關係は、個體と個體との關係となり、ときとその  
 同時存在との關係は、個體と世界との關係にまでなる」  
 (頁七六)のである。茲に時間・個體・世界の三一的構造が論  
 理的に闡明される。

さて行爲が絶對無の深淵に裏づけられる結果、それは  
 表現的性格をおびるやうになる。すなはち個が行爲的自  
 己の深奥に徹し、無にして見る立場に立つとき、凡ての  
 在るものは表現の性質を持つに至り、そこに内外相即の  
 關係が生じてくる。といつても、表現は内から外へ出る  
 のでもなければ、内―外の關係に於て在るのではない。  
 むしろ逆に、かかる關係は表現に媒介されてはじめて成  
 立つのである。換言すれば、表現の媒介的性格の限定と  
 して、初めて内―外といふ如き關係が可能となるのであ  
 る。従つて表現の本質は意識にはなく、むしろ表現の  
 世界性に求められねばならない(頁三三〇)。ところで、個的  
 主體が自己の深奥に徹し、自己を無にして見るものと觀  
 する、といふのは畢竟行爲的直觀の立場に立つ謂にほか  
 ならない。それ故表現と行爲的直觀とは緊密なつながり  
 を有つてゐる。けだし行爲的直觀とは精神が自己になる  
 ための、自己が自己になるための、はたらきそのものの  
 直觀である。この意味で行爲的直觀は即ち精神の自己表  
 現・自己形成である。尤もこの場合それは、形成的・生  
 産的空間としての身體によつて媒介される必要がある  
 (河出書房版『藝術哲學』所載の論)。  
 (文自己表現、同書一三五頁參照)。

いつたい直觀と表現とは本來相反する概念である。と  
 いふのは、直觀はいはば內的・時間的・作用的であるが、  
 表現は外的・空間的・形成的であるから。直觀とはもと  
 もと「内に於いて充足する一すぢのはたらき」(藝術哲學)  
 である。然るに「表現に於いては、到る處、相ふれるも  
 のみな我と撞着する」(同書)。したがつて兩者は互に深く  
 切斷されてはゐるが、しかもかかる切斷を媒介として却  
 つて結合される。表現の主體たる形成的人間は、まこと

に矛盾するものの綜合者である。それ故に直観から表現への發展は、自己とその矛盾との綜合であり、形成的・生産的世界(空間)によつて媒介されてゐるのである。さうしてかかる形成的空間は必然に身體と結びつく。なぜなら、「身體は一つの生きた、生産的な空間」(五六)であり、「生産力をその中に藏する空間、したがつて生産的種性をその中に藏する空間」(四四)であるから。かくして「個が自己自身になるといふことは、自己自身を表現的に形成することである。個はこのとき、形成的にはたらくところの個であると共に、同時に、生産的空間それ自身の自己限定となる」(四)のである。従つて「直観は時間的であり、時間は時間として切斷されながら、しかも各々の瞬間の同時存在を可能にする形成的空間を介して表現にまで發展する」(四二頁)のである。かかる發展は、時間を同時存在的につつむ永遠の今において可能とならぬ。それ故表現の成立する場處はこれを措いて他に求められない。この意味で形成的空間とは永遠のいまの限定にほかならない。然るに永遠のいまの底には無の深淵が横たはる。ひとは前者とふれるかぎり、同時に後者とふれてゐるのである。人間は畢竟、永遠と深淵との綜合者

である(『幾何哲學』)。  
(五三頁參照)

以上本書のテーマに従つて著者の思想を瞥見してきたのであるが、それは著者の精緻で含蓄ある思索を再現するには餘りにも粗雑にすぎた惧れがある。然し如上の粗笨な敘述からでも、著者が西田哲學に *implito* なるものの *explicito* な、かつ *original* な展開を志して居られるといふ印象だけは汲みとることができよう。さうしてかかる印象は、論理に關する考へ方においてとりわけ顯著ではあるまいか。とにかく著者は論理の原形を無の場所の論理、永遠の今の論理、に求められ、ここに表現の世界たる現實の世界と論理的なるものとの紐帯を見出される。ここでは無の場所の論理が即ち表現の論理である。また前にも述べたやうに、この際著者の思索の歩みを導くかに見えるのは「同時存在」の考へ方である。この意味で、著者の論理は「同時存在の論理」と特徴づけられてもよいであらう。同時存在は一見、例へば「作られたものから作るものへ」といふ如き過程面よりも、「作られたものと作るものが同時に在る」といふ靜止面を強調するやうに思はれるかも知れない。然しかかる解釋は恐らく著者の眞意から遠ざかるであらう。著者のいふ

同時存在は、作られたものと作るものが、無底的に切斷されながら、却つて矛盾的統一に達する動態を意味する、と解される。これと聯關して筆者は、ハイデッガーがそのカント書において、「經驗一般の可能性の制約は同時に經驗の對象の可能性の制約である」といふ最高綜合原則の重心は、カント自身ゲンユペルトにした個所（即ち傍點の個所）にはなく、むしろ「同時に……である」といふ點に存する、と述べてゐるのを想ひ起す。これは勿論著者の立場をハイデッガーのそれと同視するからではない。むしろ逆に、彼が同時存在を力説しながらも、何故著者の如くその深義に徹し得なかつたか、といふ理由を考へる興味からである。

ところで筆者の幼稚な感想を述べることが許されるところれば、同時存在の意義は、それを判斷の構造にあてはめて見るとき、繫辭において最も切實に現れるのであるまいか。従つて同時存在の論理は繫辭の論理である方が一層適切ではなからうか。思ふに著者が繫辭の意義について關説されるところが比較的少いのは、同時存在の論理を述語の論理とされるからであらう。さうしてこのことは、同時存在の論理を場處の論理とされることと聯

關して、正當な理由を有つてもあらう。然しながら「AがBであるといへば、AはまさしくBになりきるのである。それはまことにBになりきれるか、なりきれないかを定めるのであつて、AがBを持つか持たないかを定めるのではない」(頁七)といはれるやうに、判斷とは二者選一的な決斷である。その限り判斷の重心は、AがBを持つか持たぬかといふことや、BがAを包むか包まぬかといふことよりも、むしろ「である」(になる)・「でない」(にならぬ)といふ過程的或は建設的な斷定に存するのであるまいか。尤もこれは筆者の述語論理に關する無理解に基づく漠然たる感想にすぎないが。

次に時間論に關していへば、「すべての時は流轉しながら、しかもすべては同時存在に於てある」(頁五)、即ち時の各々は互に前後無限に際斷されながら、而もそのことによつて同時存在の全一を構成する、と考へざるを得ない。またかく同時存在させるものが永遠のいまであることも、まさに著者の説かれる通りである。ただ筆者の未熟な考へから、場處的世界が「取初から」ときを「包攝する」と見られるのは、時間的なるものに對する空間的なるものの優位・深次元性を強調されるかに思はれて、

前者の後者に對する獨立性が危くなるやうに感じられる。但しこれも、ハイデッガーの時間觀に影響された筆者の根據なき杞憂であらうし、また著者の右の如き主張は「社會存在論」に「時間と空間とは同時にある」(二二頁)といはれるのと趣旨においては變りはないであらう。けれども、時間的なるものはどこまでも時間的なるものであり、空間的なるものはどこまでも空間的なるものでありながら、しかもそれらが同時存在する、といふ意味を表はすには、「社會存在論」のやうな表現の方が適切ではあるまいか。いつたい「同時存在」といふ概念は——「永遠の今」といふそれも同様であるが——本來時間規定を含んでゐる。従つてそれは直截に「於てある場所」といふ如き空間的なるものと相蔽ふよりも、むしろこれと時間的なるものとの無底的・動靜一如的統一を意味する筈である。この點からいへば、場所的世界が最初からときを包攝する、といふよりも、両者が同時存在する、といふ方が語義に忠實なるのみならず、また同時存在の過程性をより明瞭に表現しうるのではなからうか。總じて永遠が時間を包摂するところでは、時間は獨自の意義を失ふのではあるまいか。併しこれもまた「無の場所」を

十分に理解しない筆者の迷蒙にすぎぬかも知れない。

なほまた著者によれば、「ときについて重要なことは、各々のときは、……互に重疊することもなく、また聖礙することもないといふことである。ときと、ときは、前後全く際断されて、一つのときと他のときと混入することも重疊することもない」(二三)、いひかへると「一つのときが他のときとみだりに聖礙重疊することなく、互に獨立する」(二六)のである。これは確かに時の時成性格を深く洞察された主張である。然しその反面に、著者が種の本質を「質料の重疊による〔生産〕力のゆがみ」(註三五・九頁等)として把握されたやうに、時も質料的には重疊する一面を有つ、と考へねばならないのではあるまいか。少くとも傳承の主體的・基體的統一性(例へば)の如きは、時をかく解することによつて一層明瞭に理解できるやうに思はれる。

最後に著者の表現思想について感想を述べるには、筆者は餘りに無根據である。それ故筆者にとつて興味深い考へ方を、「社會存在論」や論文「自己表現」に従つて點綴するだけに止めよう。著者によれば、個は行爲の主體として一方世界の表現點でありながら、他方世界から

の超出點である。すなはち「個體は、現實的世界の切點として、云はば世界の表現體でありながら、同時に表現點性格をつき抜けることが出来る」(社會存在論 一五八頁)。ところが「個體の主體的超出は、同時に個體的多に於いて自己を表现出する世界の自己限定」(社會存在論 一八三頁)となる。いひかへると「個體の主體的行爲が、したがつてその超出性の尖端が、同時に世界そのものの自己限定として表現的に見られる」(社會存在論 一八五頁)のである。さうしてかかる人間の形成——自己表現は、永遠のいまの立場において行はれねばならない。然るに「表現が單なる直観でなく、形成的世界に於いて客觀的に行はれるものである以上、主觀を超越して、世界の側から與へられる基體をその背後に負つてゐる」(社會存在論 一五三頁)。この基體とは「我のはたらきをつつむ永遠のいまさへ割つてゐるところのもの……無の深淵である」(社會存在論 一五四頁)。かくして人間とは「永遠と深淵との綜合者である」(社會存在論 一五三頁)、或は形成的人間と深淵的人間との綜合者である。

以上筆者は思ひつくままに、本書の概觀を試み、あはせて貧しい讀後感を述べてきた。併し本書の豊饒で深遠な内容は、右の如き蕪雜な素描によつて盡さるべくもな

い。況して散漫な讀後感に至つては、畢竟筆者自身の蒙昧を曝露した以外の何ものでもないであらう。筆者は右の如き素描が果して著者の眞意を誤りなく傳へるか否かをさへ惧れる。然しながら筆者の敘述や讀後感の如何には關りなく、本書は我が哲學界に聳立する燦たる金字塔であり、その最高水準のひとつを形づくる文化的共同財であらう。筆者は常に哲學の徒のみならず、一般の讀書人が自ら本書を味讀され、そこから無限の滋味を汲みとられんことを望んでやまない。

終りに臨んで筆者は、舊師たる著者に滿腔の敬意を表すると共に、如上の禮を失した紹介や感想についてひたすら宥恕を仰ぐ次第である。(弘文堂書房、菊版三三三頁、定價二圓八拾錢)